



『福寿海』

一人の健康から地球の未来まで

# AKATSUKA グリーン通信

Green Communication

vol.166 2013.1月号

# お正月の縁起もの 福寿草

お正月が近づくと必ず出回る植物のひとつに福寿草があります。その歴史は古く元々は日本各地の山林に自生する植物ですが、旧暦の正月頃に明るい黄色の花を咲かせるため、正月飾りとして用いられるようになつたと言われています。光沢のある明るい黄金色の花は暖かみがあり、いかにも縁起がよさそうなので、お正月の花としてピッタリなのは、誰もが納得するところであります。園芸ブームとなつた江戸時代には盛んに育種が行われ、100を超える品種が存在していたと言われています。しかし、そのほとんどは失われ、現在ではほんの少しの品種しか出回っていないのは残念なことです。

## ◆魅力的な品種

一般的に出回っているのは、黄色の八重咲きの「福寿海」という品種ですが、濃いオレンジの「秩父紅」や「紅撫子」、花弁数が非常に多く、中心に緑の花弁の入る「三段咲き」や「花園」など、いくつかの品種が鉢植えとして出回っています。これらを集めてみるのも面白いでしょう。パンジーーやビオラのような草花とは違う魅力があり、じつくりと付き合ってみるととても良い植物と言えます。

## ◆栽培は意外と簡単！

丈夫な植物なので、栽培は意外と簡単です。ただし出回ってくる鉢植えはかなり根を切り詰め小さな鉢に植えてあるものが多いので、入手したらすぐ大きめの鉢に植え替えると良いで

## ◆太陽の光を味方に

早春に花を咲かせ、夏には枯れてしまう宿根草で、同じような生活サイクルをもつ植物にカタクリやイチリンソウなどがあります。山林の落葉樹の下で、まだ木々が葉を広げる前の早春に急いで花を咲かせ、葉を広げ、そして木々が葉を広げる頃には眠りに付いてしまうという植物たちで、「春植物」とか「スプリングエフェメラル」(直訳)すると、春のはかないものたち」と呼ばれるグループです。早春のいつとき、華やかに花を咲かせ、そのあと幻のように消えてしまう、まさに春の妖精のようないい花たちです。その中でも、真っ先に花を咲かせるのが福寿草なのです。その光沢のある黄色いカップ状の花は日の光を受けて初めて開き、しかも常に太陽の光を正面から受けるようにその向きを変えてゆくそうです。パラボラアンテナのようなその花は効率良く太陽熱を集めため、メシベの付近は周囲よりも6°C近くも温度が高くなつており、この暖かさを求めて昆虫が集まり、花粉の媒介をしてくれる仕組みになっています。

ラボラアンテナのようなその花は効率よく太陽熱を集めため、メシベの付近は周囲よりも6°C近くも温度が高くなつており、この暖かさを求めて昆虫が集まり、花粉の媒介をしてくれる仕組みになっています。

5月中旬頃になると葉が枯れて休眠に入りますが、なるべく涼しい木陰のようないところに置いて、カラカラにならない程度に水を与えるながら、また秋まで保存しておきます。

非常に根の発達の早い植物なので、2年に一度くらいは秋に株分けをします。時期は9月から10月頃が適期で、大まかに2~3株に分けるようになります。



『紅撫子』